

〈研究ノート〉

四川チベット族諸集団の研究

松岡 正子

四川のチベット族は、人口149万6524人（2010年）で、チベット族総人口の23.8%を占め、西藏自治区43.2%に次ぐ人口を擁する。13の下位グループに分かれ、主に四川省西部の甘孜藏族自治州、阿壩藏族羌族自治州、涼山彝族自治州木里藏族自治县に集中して居住する（図1）。彼らの言語は、漢・チベット語系チベット・ビルマ語群に属し、さらにチベット語支と

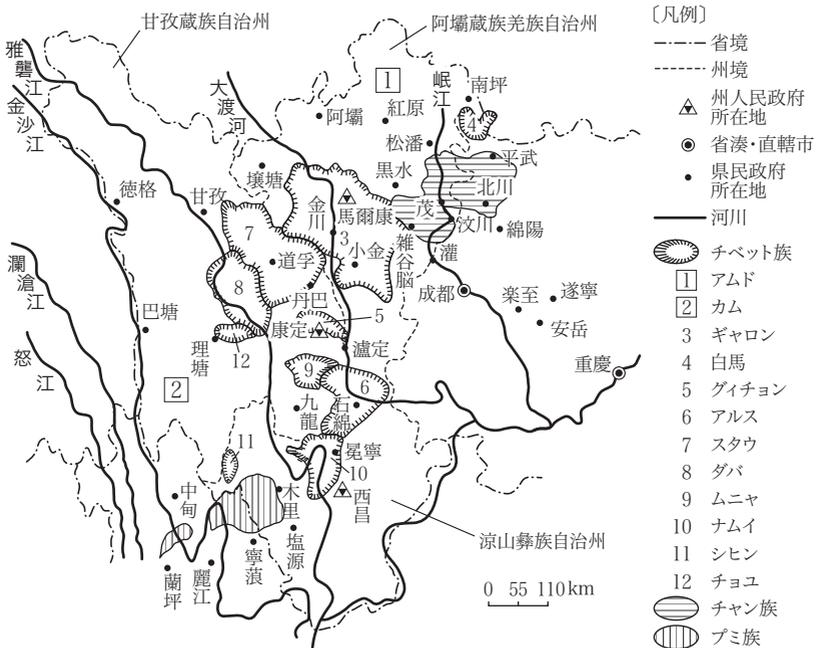


図1 四川チベット族の分布

〔出所〕 四川省人口普查辦公室編『四川藏族人口』（中国統計出版社、1994）4-6頁、孫宏開「六江流域の民族語言及其系属分類」（『民族学報』1983-3）等より作成。〔松岡2000：239〕

チャン語支の2つに分かれる。前者にはアムド・チベット族（以下、アムドと記す）、カム・チベット族（以下、カムと記す）が属し、四川チベット族人口の約90%を占める。後者は嘉絨チベット族（以下、ギャロンと記す）、白馬チベット族および康定以南に居住する貴琼、爾蘇、爾龔、扎巴、木雅、納木依、史興、却域、普米の9つのチベット族集団である。

ギャロン以下の諸集団は、民国期まで「西番」とよばれていたが、人民共和国成立後の民族識別によってチベット族に属するとされた。しかし集団の形成の歴史や習俗、言語等からみれば、西藏のチベット族や四川のアムド、カムよりも、むしろ東に隣接するチャン族のそれらに類似しており、7世紀以前にこの一帯に居住していた「古羌」諸集団の基層文化の存在を推測させる。またこの諸集団には、チベット仏教伝来以前のチベット族の土着宗教とされるボン教が伝えられていることでも注目されている。

本稿では、四川チベット族のうち、ギャロン以下のチベット族諸集団（以下、四川チベット族諸集団と記す）をとりあげる。それらはチベット族とチャン族それぞれの研究において重要なキーワードをもつ存在であるからである⁽¹⁾。四川チベット族諸集団に関する研究は、1980年代以降、費孝通が提唱した「藏彝走廊」の研究として進められている。そこで本稿では、藏彝走廊研究と、その代表的なテーマの一つである石碣研究をとりあげて、四川チベット族諸集団の研究の現状と課題について検討する。

1. 藏彝走廊研究

「藏彝走廊」とは、費孝通が1980年前後に提起した歴史、民族、文化に関する新たな区域概念である。費孝通は、「中華民族多元一体格局」論を展開するにあたって、中国を北部草原、東北部高山森林、西南部青藏高原、雲貴高原、沿海、中原の6区域と周辺部を縦断する藏彝、西北民族、南嶺の3つの「走廊」（回廊）から形成されるとして、走廊に居住する民族の流動性や多様な歴史文化の蓄積を指摘した⁽²⁾。

藏彝走廊は、地理的には四川、雲南、西藏の3省が隣接する山脈部と高

(1) 李紹明氏(2007年)、石碩氏(2015年)らへの筆者のインタビュー [松岡2000:239-246]。

(2) 李紹明 [2010]「藏彝走廊研究的回顧與前瞻」。

山峡谷部からなる横断山脈区域で、岷江、大渡河、雅礮江、金沙江、瀾滄江、怒江の6大河が南北に貫流する。厳密に言えば、青藏高原東部の高山峡谷区、河西北高原区、滇西北横断山脈地区高山峡谷区と滇西高原区の一部であり、行政的には四川省の甘孜藏族自治州、阿壩藏族自治州、涼山彝族自治州と攀枝花市、雲南省の迪慶藏族自治州、怒江傈僳族自治州と麗江市、西藏自治区の昌都地区などが含まれる。そこには、漢・チベット語群チベット・ビルマ語系のチベット語支、チャン語支、イ語支に属する言語をもつチベット、イ、チャン、ペー、ナシ、リス、プミ、トゥローン、ヌー、ハニ、ジンポー、ラフ、チヌー等の民族集団が居住し、総人口1000余万人のうち約530万が少数民族で、残りの470万人が漢族である。歴史的には、チベット・ビルマ語系の諸民族が南下して、北上したミャオ・ヤオ語系の民族と接触し融合した地域であるとされる⁽³⁾。

すなわち藏彝走廊は、四川省の少数民族地域および雲南省西部をほぼ覆い、そこに居住する民族集団個々の研究だけではなく、民族集団間の交流や文化の受容などを考えるうえで有効な概念であるといえる。そのため四川や雲南で民族研究を行う李紹明らの研究者たちは、藏彝走廊に素早く反応した。彼らは、当該区の研究には行政区域を超えた総合的な民族調査が必要であるとして、費孝通や馬耀らの支持をうけて1980年、中国西南民族研究学会を設立し、1982年5月に六江流域民族総合科学考察隊を結成した。同隊は四川省民族研究所の李紹明を隊長、四川大学の童恩正と雲南大学の何耀華を副隊長とし、各分野から70余人が参加した。82年と83～84年に調査が行われ、その成果は『雅礮江下遊考察報告』『独龍族社会歴史総合考察報告』『滇藏高原考察報告』『雅礮江上遊考察報告』にまとめられた(内部刊行)。さらに「古代西南絲綢之路」や「藏彝走廊下的民族語言」の研究や、個別のテーマとして「康巴文化」「金沙江文化」「牦牛經濟與文化」「禹羌文化」「岷江上遊考古發掘與研究」「彝族卒摩文化」「茶馬古道」「昌都地区」「納西東巴文化」「三江並流区域自然與文化」「卡瓦格博雪山区域生態與人文」等の調査研究が進められた。

学術シンポジウムの開催やその論文集刊行も継続的に行われた。2003

(3) 藏彝走廊研究叢書編輯委員會編 [2008: 1-16] 参照。

年11月には国内初の「〈蔵彝走廊〉歴史文化学術討論会」(成都)が開かれ、その成果は石碩主編『蔵彝走廊：歴史與文化』(2005年)にまとめられた。本論文集には巻末(355-472頁)に1949年以前の蔵彝走廊に関連する研究論文索引が付されており、2000年代初期までの研究成果と当時の研究水準を知るうえで有用である。その後、四川大学蔵学研究所は、2005年8月にアメリカのオハイオ州立大学人類学系と「蔵彝走廊的族群互動」(成都)を共催した。また四川省民族研究所は、2006年3月にアメリカのワシントン大学と攀枝花社区の追跡調査を行い、同年6月には台湾中央研究院と蔵彝走廊共同調査、同年7月に四川省民族研究会と「羌文化学術研討会」(四川省汶川県)を開催した。

民族識別について、1960年代から討議されている平武県の白馬チベット族についても検討が進められた。四川省民族研究所は2005年10月に四川省民族研究会と「蔵彝走廊東部辺縁的族群互動」(四川省平武県)を開催し、袁曉文・李錦主編『蔵彝走廊東部辺縁族群互動與發展』(2006年)を刊行した。また中山大学人類学系は、2006年に四川省民族研究所や平武県との共同で同県に教学與研究實習基地を置いてフィールドワークの拠点とし、2007年10月には四川省民族研究所とともに「蔵彝走廊族群與区域文化研討会」(平武県)を開催した。劉志揚らは5年間のフィールドワークに基づいて『蔵彝走廊里的白馬蔵族：習俗、信仰與社会』(2012年)をまとめている。

2008年雲南省昆明で開催された世界人類学民族学大会は、蔵彝走廊研究にとって大きな飛躍の契機となった。この大会のために「蔵彝走廊研究叢書」が2007年12月より刊行されたからである。本叢書は、これまでの蔵彝走廊研究に関する内部刊行物も含めた基本的な調査報告および論文をほぼ網羅しており、今後の研究にとって極めて有用である。なお2008年世界人類学民族学大会では、蔵彝走廊分科会が設けられ、その報告集が袁曉文主編『蔵彝走廊：文化多様性、族際互動與發展』上下巻(2010年)にまとめられている。

「蔵彝走廊研究叢書」の内容は、大きく3つに分けられる。その一は、蔵彝走廊に関する1980年代の研究報告で、重要かつ未公開のもの。馬長寿主編・李紹明整理『涼山美姑九口郷社会歴史調査』(2007年)、蔡家麒『蔵

彝走廊中の独竜族社会歴史考察』(2008年)、李紹明・童恩正主編『雅砻江流域民族考察報告』(2008年)である。これらは当時内部資料とされたが、1980年代初期という時期的な重要性、すなわち経済的開発がまだほとんど始まっていなかったために、閉鎖的な環境のなかでかつての社会や文化の状況が比較的よく保持されたままの状況が記されており、その資料的価値は極めて高い。

その二は、李紹明や李星星らの指導のもとで四川省民族研究所を中心に進められた2000年初期から近年までの調査報告である。四川チベット族諸集団のなかでも爾蘇、木雅、扎巴などこれまでほとんど報告されたことのないチベット集団が調査対象とされ、調査地が明記され、詳細な報告がなされている。李星星『蟹螺蔵族：民族学田野調査及研究』(2007年)、李紹明・劉俊波編『爾蘇蔵族研究』(2008年)、馮敏『扎巴蔵族：21世紀人類学母系制社会田野調査』(2010年)のほか、雲南のモソ人とナシ人を対象とした李錦『民族文化生態與經濟協調發展—対瀘沽湖周辺及香格라의研究』(2008年)、チャン族の民族誌ともいえる耿静『汶川羅卜寨田野調査報告』(2014年)がある。また李星星・馮敏・李錦ら『長江上遊四川横断山区生態移民研究』(2007年)は、四川省の塩源県9村と紅原県1村において生態移民を前期と近年に分けて調査し、分析したものである。

その三は、蔵彝走廊研究関連の論著で、李紹明『蔵彝走廊民族歴史文化』(2008年)と李星星『李星星論蔵彝走廊』(2008年)の2冊が刊行されている。このうち前者は、民族歴史文化研究の第一人者で、1980年代以来蔵彝走廊研究をリードしてこられた李紹明先生の代表作27編を収録したものである。蔵彝走廊および民族走廊学説に関する総論と諸説、当該地区の主要民族および古代民族を対象とした個別のテーマに関する歴史文化的考察が述べられており、蔵彝走廊に関するこれまでの研究状況と水準を総合的に知ることができる。後者は、執筆者の蔵彝走廊に関する論考と調査成果が収められており、3部からなる。第1部は中国全体の民族走廊という視点からのべ、第2部は個々のテーマについて交通路、地理、民族歴史などから論じる。第3部はフィールドワークの日誌と考察記録から構成され、フィールドワークの視点や方法、プロセスを知ることができて参考になる。

最後に、蔵彝走廊に関する今後の課題として、「蔵彝走廊研究叢書」総序では以下の8点をあげる。第一は、民族学的理論が不十分であること。第二は、地理的範囲が明確ではないこと。第三は、考古学上の発掘と研究が不十分であること。特に、雅礮江や金沙江、瀾滄江、怒江流域の発掘が岷江や大渡河流域に比べてはるかに少ない。岷江と大渡河流域に関しても5000年前の茂県營盤山遺跡と古代の馬家窯文化との関係、多出する石棺葬との関係についてもなお不明確である。第四は、民族史における古代民族の氐、羌、戎、土着民、その他に関する統一見解がないこと。第五は、各民族集団の言語分類に対する意見が統一されていないこと。第六は、民族文化に関して、厳密な民族志がかけているため通時的にも共時的にも集団間の比較ができないこと。第七は、新たな視点として生態民族学からの考察が必要であること。例えば生態環境が経済活動の変化や伝統社会へ及ぼす影響などのテーマである。第八は、民族学的視点からの民族経済と発展に関する問題の必要性である。

以上に指摘された課題は、蔵彝走廊という概念が西南中国における民族学的分析に有用であると同時に、その有用性が曖昧性に起因していることを示している。そのため、蔵彝走廊の研究には、ある学説や理論に基づくトップダウン的分析よりも、詳細な民族志に基づくボトムアップ的分析のほうが必要かつ有効ではないかと思われる。また当該地区でも経済発展や観光開発の影響を受けて急速に民族言語の衰退や生活の変化が進んでいるため、民族言語調査や民族志の作成、考古学的作業が急務となっている。

2. 石碣研究

石碣は、蔵彝走廊のチャン族と四川チベット族諸集団が共有する文化遺産の一つである。歴史資料によればその起源は紀元前に遡るが、分布が広範囲で形態が多様であること、文献資料が少ないことなどから、これまで十分な研究がなされていなかった。しかし石碩・楊嘉銘・鄒立波『青蔵高原碣樓研究』(中国社会科学出版社、2012年)により、石碣研究は大きく進展した。本書は、内容上3つに大別される。第1部(第1章)は先行研究の分析で、従来の研究や報告を可能な限り収集してその成果と問題点を

明らかにする。第2部(第2、3、4章)は従来成果と2005年以降の筆者らの現地調査による資料を加えてまとめられた青藏高原碉楼の基礎データである。本書の約3分1の分量を占め、主に考古学と歴史学、建築学からの資料に図表や写真を加えて説明し、全体像を明らかにする。第3部(第5章以下)は筆者らの新たな分析である。本書は2011年の国家哲学社会科学成果文庫にも選ばれ、高い評価を得ている。本稿では、本書に沿って碉楼に関する資料を整理したうえで、本書に提起された課題について若干の検討を加えたい。

『青藏高原碉楼研究』は、序言と12の章からなる。序言では、本書の特徴と学術上の意義を以下の4点にまとめる。第一は、本書は全面的で系統的な研究であること。青藏高原の碉楼は、分布の地域が広くて分散しており、類型が多様であるうえに文献資料が少ないため、全面的かつ系統的な研究が欠けていた。特に、従来は調査対象が青藏高原東部地域に偏っており、チベット地区やその他の地域についてはほとんど報告されていなかった。第二は、青藏高原の碉楼を材質や平面形態、内部構造、特徴などに基づいて、横断山脈系とヒマラヤ山脈区系の2つに分けたこと。これは近年、チベット地区の資料が追加されたことによる。第三は、碉楼の起源について、従来は戦争に関わる防御性のみがあげられていたが、民族志やフィールドワーク等の資料から、原初の形態として人と神とを結ぶ祭祀性を指摘する。また呼称である「邛籠」の「邛」が、チベット語の「琼」(大鵬鳥、ボン教の「琼鳥」と同音であり、碉楼の密集する地域がボン教の盛んな地域とかなり重複していることから、ボン教との関係も示唆する。第四は、地域の歴史文化との関係である。碉楼は孤立した文化遺産ではなく、地域の住民や社会と密接に繋がっており、それは地名や成人儀礼、驅邪逐魔、建築上の禁忌などの民俗事象との関連からうかがうことができる。さらに権力や財富、祖先、家業等を表象する象徴性をもつことも指摘する。

以上の特徴で注目されるのは、調査が進むチベット地区および周辺ヒマラヤ山脈系碉楼の成果である。特にこれまで扱われなかった土碉についての資料が期待される。これによって従来の石碉を中心とする横断山脈系との異同や関連性を分析し、全面的かつ系統的な碉楼研究が可能になる。このほか歴史学や考古学が中心であった従来の研究に宗教学や民俗学の視

点が加えられてボン教や石棺葬、地域の民俗との関連が示されている点も重要である。

なお、本書には巻頭に「康定古碉群地理位置示意图」「青藏高原碉楼分布図」「青蔵石棺葬分布図」が掲載されており、さらに12枚の表と241枚の写真、図録が収められている。これらの図表、写真は先行研究と2005年以来積み重ねられたフィールドワークの成果であり、詳細で多くの内容を含んでおり、高い資料的価値をもつ。

以下、各章を先行研究、基礎データ、分析の3つの部分に分け、課題をまとめる。

先行研究に関わる第1章「緒論」では、碉楼の概述、先行研究、本書の研究と意義について述べる。碉楼は、文献記録では初出が後漢で、岷江上流の冉駹部落の「邛籠」（『後漢書』南蛮西南夷列伝）とされ、北朝の附国では「瓊」（『北史』附国伝）と記されている。分布地域はヒマラヤ山脈系と横断山脈系の2つに大別される。前者は青藏高原の西蔵昌都地区、雅魯蔵布江以南の林芝などと雲南の迪慶州、後者は青藏高原東部の蔵羌地区で、特にギャロン・チベット族地区に最も密集し、数量、類型ともに最多である。碉楼の類型は、材料によれば石碉と土碉の2種があり、造形によれば三、四、五、六、八、十二、十三角形の7種、機能によれば家碉、経堂碉、寨碉など数種に分かれる。青藏高原の碉楼は、清代乾隆年間の2回の大小金川の役で国内に広く知られるようになった。当該地域はギャロン・チベット族の中心地で、清軍は碉楼群の攻略に苦戦し、北京の香山に碉楼を建て攻略演習をするなどによって7年余の歳月をかけて勝利した。近年は、観光資源として注目されている。2005年『中国国家地理』において碉楼群で知られる甘孜州丹巴県の村が中国で最も美しい古鎮の一つに選ばれ、2006年には中国政府の「世界文化遺産預備名録」（世界文化遺産予備一覧表）にも入れられ、国内各地からの観光客が増加している。

先行研究については、1949年以前は任乃強や馬長寿、庄学本らの専門的な研究以外は、多くが紹介にとどまる。任乃強は『西康図経：民俗編』（1929年）でその建造技術を「西番建築物之極品」と評価し、馬長寿は『嘉絨民俗社会史』（1942年）で漢の「冉駹」、唐の「嘉良夷」、ギャロン・チベット族との族源上の関係を指摘した上でギャロン地区を碉楼の発祥地とす

る。庄学本は『西康丹巴調査報告』（1938年）で丹巴県中路郷一体の碉楼の分布を詳述し、漢族はこれを金川事変時の遺跡とするが、地元では碉楼は金川事変以前からあり、一村あるいは一族がそれぞれ防御のために造ったと伝える。

1949年以後は、民族地区では民主改革や民族識別工作、政治運動が続いたため、調査研究が再開されたのは1990年代以降である。歴史学、民族学、建築学等の視点から行われ、内容は起源と機能、分布や類型および文化的意味、建築技術の3つに分けられる。起源については、ギャロン・チベット族説とチャン族説の2説があり、ギャロン族説が優勢である。ギャロン族説は馬長寿が提唱し（1942）、楊嘉銘は起源地を小金川と丹巴に特定し（1988）、李星星は機能には防御のほかに祭祀性や象徴的意義があったとする。鄧廷良は石棺葬との関連をいい、徐学書は岷江上流の冉駹がチャン族の南下に備えて石碉を造ったとする。一方、チャン族説は、任乃強が起源を古代の鐘羌とし、孫宏開は言語学的視点から「邛籠」（碉楼）はチャン語支を固有の言語とする諸集団と密接に関係すると推測し、鄧少琴は八角碉がチャン族と関わる西夏の移民の遷移と関連するとする。

機能および目的については、多くの研究者が軍事的防御とする。馬長寿（1984）、王明珂（2002）、耿直（2002）、任浩（2003）、王載波（2000）、徐平（2001）らがそれで、唐代の唐蕃戦争、清の金川事変、土司との闘争、官兵や土匪、冤家との間の絶え間のない戦いに備えて、一族に一つ、一村に複数造られ、見張りや貯蔵、避難、攻守などの機能を有した。しかし近年は、総戸数に相当するほど碉楼が密集した地域もあることから、軍事性以外の機能も注目されている。原初は人と神を繋ぐ祭祀性をもっていたが、後に軍事上の防御性が突出した（石碩2008）、早期には戦時と民家の両用であったが、後には敵に備える防御性が主となった（牟子2002）、戦争が減少した後は権勢や財富の象徴に変化した（駱明2000）、丹波ギャロンは高碉の下で成人式や喜事を行った（楊嘉銘2004）等である。

分布については、近年、ようやくチベットを中心としたヒマラヤ山脈系の調査が進められ（夏格旺堆2002）、チベットの伝統建築の視点からの論及もある（朱普選1996等）。構造や類型については、チャン族には民家型と軍用型、兼用型（民家の上に碉楼を重ねる）があり（尹浩英2004）、ギャ

ロンにも民家型と軍用型があり、前者はさらに一般人の民家と土司らの官寨に分かれ(張昌富1996)、経堂型もある(才旦2000)。横断山区系の構造や技術等については、庄春輝(2004)、宋興富ら(2006)等に詳しい。また建築技術に関しては季富政(2000)『中国羌族建築』など一部の専門的なもの以外は大同小異の記述が多い。

近年は、碉楼が内蔵する文化的意味も注目されている。任新建(1996)は石碉の分布が石棺葬や白石崇拜などの分布と重複することから、基層文化として石文化を指摘する。徐学書(2004)は石碉の歴史文化的背景を分析し、楊嘉銘(2004)は丹巴碉楼における伝説や民俗事象との関連を示し、多爾吉(1996)はギャロンの碉房(石積み民家)の分析から歴史文化的背景をのべ、馬寧ら(2006)も羌碉の文化的意味を探る。

この他、フィールドワークによる報告も増えている(鄭莉ら2002、郎維偉ら2001等)。また観光開発にともなう文化遺産価値を論ずるもの(張先進2003等)や、観光関係者や旅行者による碉楼の紹介も多出している。

以上の先行研究をふまえて、青藏高原碉楼研究の欠点が3つあげられている。第一は従来の研究が川西北のギャロン地区に偏っており、チベット地区に薄いこと。第二は全面的かつ系統的、総合的な研究が欠けていること。各分野がそれぞれに研究を進め、相互の交流、整合がない。第三は内包された歴史文化的意味の検討が足りないこと。碉楼は孤立した文化遺産ではなく、現地の民族や社会、歴史、文化と関連させて調査研究する必要があるという。そして本書は、ヒマラヤ型の調査研究の展開、各分野を総合させた学際的な研究、現地の社会や歴史、民俗を重視した碉楼の歴史文化的研究をめざすとする。

次に第2、3、4章では、青藏高原碉楼に関する基本データを考古学資料と地域ごとの分布表、133枚の写真や図でまとめる。第2章は碉楼全体に関する分布や機能、類型、特徴を述べ、横断山脈系を第3章で、ヒマラヤ山脈系を第4章で詳述する。

第2章について、第1節の分布では、巻頭の「青藏高原碉楼分布図」によって概観が示されている。横断山区系は阿壩州に75座が現存し、表1「阿壩州現存碉楼建築一覧表」(成都文物考古研究所陳劍先生提供)には名称、位置、時代、材料、平面面積、高さ、保存状況、層数が記され、すべてが

石碉で、製作年が清代、多くが四角形であること、チャン族37座は多くが高さ10数mから20数mであるのに対して、ギャロン・チベット族38座には30～40mを超えるものがあることがわかる。甘孜州も石碉が主であるが、阿壩州のような一覧表はなく、全体数は不詳。ただし丹巴県には562座が現存し、うち梭坡郷175座、中路郷81座とある（2002年）。康定県については巻頭の「康定古碉群地理位置示意图」で名称と分布位置はわかるが、表1のような一覧表はなく、詳細は不明。土碉は雲南寄りの金沙江流域や涼山州木里県、雲南省迪慶州に残存する。ヒマラヤ区系については、表2「西藏境内石碉主要分布一覧表」と表3「西藏境内土碉主要分布区域一覧表」から西藏自治区の碉楼調査が途上であること、特に土碉はこれまで注目されていなかったために調査が遅れている。なお総数は少なくとも2000～2500と推測されている。

第2節は類型と機能について記す。まず類型については、建築材料、形態、所有者によって分類し、代表的な碉楼を記す。建築材料では石碉、土碉、土石碉に分かれ、土碉は板築法を用いる。形態には四、五、六、八、十二、十三角形の6種があるが、四角形が最古、最多で母型といえ、最も広範囲に分布する。ヒマラヤ区系もほぼ四角形であるが、横断山区系は四角正方形が多い。八角形は丹巴に比較的多く、木雅文化とほぼ重複する。

所有者によれば家碉、寨碉、土司官寨碉、宗堡碉の4種に分けられる。「家碉」は戸単位に、民家に連結してより高く造る。日常的には家庭の貯蔵室で、戦時には防御を目的にする。大小金川のギャロン地区には、男子が生まれたら石と泥を準備して碉楼を造り始め、完成しなければ嫁を娶ることができないという風習がある。寨碉は一つあるいは幾つかの自然村の単位で、リーダーあるいは土司や頭人が住民を組織して造る。村の入口や周辺の小高い場所に独立して配置され、村のシンボルというだけでなく、侵入者を防ぐ防御碉であり、烽火碉、瞭望碉などでもある。「土司官寨碉」は、四川の土司制度下で土司や頭人等が住民を動員して造った碉楼である。官寨や守備衛署の一角に2本同時に建造し、官寨の左右や前後、あるいは官寨と交通の要衝に配した。戦時には防御の堡壘、平時には権力と地位のシンボルであり、祭祀や占卜を行った。碉楼の大小、高低は建造者の身分によって決まる。「宗堡碉」は明代チベット地区の「宗」制度（地方行政組織）

下に造られた碉楼で、防御壁、地下道、水道路などが一体化された城堡が造られた。

次に機能については、軍事的防御と宗教性をあげる。軍事的防御については、高山峡谷という自然環境や諸集団が分立し紛争が絶えなかったという社会歴史的要因をあげ、多くの碉楼が眺望のきく高所や軍事的要所あるいは村落の中心に配されていること、入口が地上から5～10m上にあり、各層に通風と眺望、射撃用の穴があるという構造の特徴をあげる。宗教的機能については、チベット仏教ゲルク派の「米拉日巴九層殿」と経堂碉、風水碉（清中晩期に建造、八角形が多く、鎮邪など土着信仰に関わる）をあげる。

第3章横断山脈系では、丹巴および康定の報告が目される。また2008年汶川地震での被災後、伝統工法で修復された汶川県布瓦村の土碉と、横断山脈系に属するチベット地区林芝の石碉に関する報告もある。丹巴に関しては、大小金川河、大渡河の兩岸の山腹に民家とともに自然環境と整合しながら分布しており、明正土司の統治との関連も考えられること、最も密集している梭坡郷と中路郷では海拔1900～2900mに分布しているが（主には2300～2700m）、そこはギャロン・チベット族の伝統的農業区である2200～2600mの二年三毛作区で、河床から500～600mの緩やかな台地で水源に近く、新石器時代の遺跡と石棺葬の分布区（2200～2700m）と重なっているとする。

また他地域と比較した丹巴碉楼の特性として、第一に入口が2層以上に設けられ、固い地盤の上に底部は巨石が積まれ強固であること、第二に男子誕生後、毎年1層ずつ積み上げて18歳で完成させ、碉楼の下で成年式を行う、女子も17歳になったらそこで成年式を行っていたこと。第三に家碉と戦碉のほか、多様な機能をもつ碉楼があること。第四に碉楼には多くの伝説故事があること。第五に碉楼は民家と密接な関係があり、建築材料や技術が同じであるだけでなく、家碉は民家に連結して一層高くしたものであることをあげる。これに対して康定の碉楼は、発見されたものが石碉32座（うち完全保存26）、多くが明清期で、1030年が最早とされる（表5）。四角形と八角形が主で、八角形の内部が円形なのが特徴である（図105）。海拔3100～3800mに分布し、ほぼ木雅チベット族居住区にある（図

102)。

第4章ヒマラヤ山脈系は、主にチベット自治区の山南地区とシガツェ地区に分布する。山南地区には石碉と土碉がある(2007年8月現地調査および文物調査)。石碉は河岸や交通の要所、村落、寺院の周辺などに広く分布し、洛扎県に最も多い。単体碉、家屋や外壁等を付帯した碉、寺院建築の一角にあつて防御性を有する宗堡碉に分かれ、ほぼ四角立体形で頂上は凹型と平面型がある。現存する碉楼群遺跡は数十か所あり、単体碉は200余座とされるが、宗堡碉ともども、調査はなお継続中である。土碉は粘土を用いた板築法で造られ、山南地区の措美県と隆子県に集中する。板築法はすでにラサやチャムド、シガツェなどに広く普及しており、民間の技術もかなり高く、5、6層の高層建築が可能である。

シガツェ地区には土碉、石碉ともあり、分散して分布する。大部分が清の2回の郭爾喀戦争時にネパールや四川ギャロン地区から来た兵によって造られた軍碉である。聶拉木県澎曲河一帯百余kmには大碉1と小碉4～5の組合せが1kmごとに1座ずつ並んでいるという。また官寨や宗堡、寺院と連結して碉寨を形成しているものもある。

続く第5章以下は今後の展開が期待されるテーマについての分析である。5、6、7章は碉楼の起源に関するもので、5章は防御を目的とするという通説の否定、6章はボン教との関連、7章は先行文献でもすでに指摘された石棺葬や石積建築との関連を整理する(執筆担当:石碩)。8章は清の金川の役、瞻对戦役、対ネパール戦の3つの戦いにおける碉楼の意味と清軍に及ぼした影響について言及しており(皺立波)、碉楼の軍事的機能の盛衰と背景が詳述され、大変参考になる。9章は先行研究や民族志等にある民俗学的資料を整理分類したもので、碉楼建造伝説として大鵬鳥巢穴説、祭祀天神説、鎮妖驅魔説、戦争防御説、民俗事象として成年儀礼や婚姻対象の選抜に関わる習俗、碉楼に係する地名、象徴性を示すものとして権力や財富、性別、家業や祖先の記憶の事例を紹介する(陳東)。10章は碉楼の建築技術が詳述されている(楊嘉銘)、11章は碉楼に関する比較研究の可能性をさぐるもので、ヒマラヤ山脈系と横断山脈系、四川チベット族とチャン族、青蔵高原とヨーロッパ、青蔵高原碉と福建土楼、広東開平碉楼を比較する(楊嘉銘)、12章は青蔵高原碉楼文化の価値と保護に関

する概説である(蔣慶華)。以下では、新たな説が展開されている5～7章を紹介する。

第5章では、碉楼は防御のために造られたとする通説に対して、原初は天神を祀るため、神性をもつものであると論ずる。まず通説に対する疑問として、炭素14年代測定によればチャン族地区、ギャロン地区および康定、九龍、木里、チベット地区工布江達県に現存する碉楼の建設は13～15世紀に集中しているが、碉楼の目的が戦いのための防御であれば、これらの地域、特に碉楼が最も密集するギャロン地区は最も戦いが頻繁におき、また一千年以上もの間、戦いが連綿と続いていたのかと問う。そして蔵彝走廊地区で最古の習俗を残す鮮水河流域の扎巴チベット族を事例として、当該地では民家と碉楼が連結され、碉楼は神性をもつものであり、伝説では碉楼は天神を祀るために造られた神の居る場所であること、碉楼の角数は神性や権力、財富を象徴することを報告し、さらに蔵彝走廊で発見された石棺葬や石積家屋などにみられる石崇拜、神山信仰や史詩「羌戈大戦」、屋上のラサなどに象徴される高所と神性との関連から、原初の意味は神を祀ることにあると論じる。

多くの研究者にとって碉楼の目的が防御にあるというのは、碉楼研究の前提ともいえるほどの疑いようのない通説であった。それは『北史』などの歴史文献にすでに防御のことが記されていることや、碉楼が中国国内で広く知られるようになったのが清代乾隆年間の大小金川の役以降であり、一貫して防御に関わっていたことによると思われる。金川の役では高山峡谷地帯という地理的条件と難攻不落の碉楼のために清軍は大きな被害をだした。しかしそこでの攻略法は新たな戦術となり、その後の対ネパール戦ではチベット地区に碉楼による防衛線を建設した。その後、重火器等の発達によって戦闘の形がかわり、碉楼は軍事的機能を失い、朽ちるがまま放置され、現在に至っている。最も本質的な問題が石碩によって再検討されたことの意義は大きい。

石碩の論に大きなヒントになったのが度々引用されている劉勇・馮敏『鮮水河畔道孚藏族多元文化』(2005年)の扎巴チベット族の民俗事象である。扎巴チベット族にはついてさらに馮敏『扎巴藏族:21世紀人類学母系制社会田野調査』(蔵彝走廊研究叢書、2010年)もある。石碩は民族

誌の必要性を指摘する。この点については、筆者も同感である。ただし、民俗関係の資料は、扎巴に関するもの以外にもすでに報告されている。何耀華によれば、冕寧県廟頂の里汝チベット族では、碉楼を「ア」とよび、10年に一度、山神を祀る活動を行っていたこと、筆者の2015年の調査でも、丹巴では家碉には碉神がいる、屋上で4神を祀るなどと語られていること、チャン族のある地域では、祭山会が「石碉会」とも漢訳されているなどである。これは、家碉に関する調査が不可欠であることを示すものである。

第6章は、碉楼とボン教との関連を論ずる。碉楼の初出の「邛籠」（『後漢書』冉駹夷）の意味について、唐・李賢は飛鳥を意味する（『説文解字』「雕」と注する。「邛籠」は『隋書』附国嘉良に「石巢」とされ、「邛」は鳥を示唆するからである。さらに冉駹夷、嘉良、嘉戎の密接な関係や、同音であるという点から「邛」は「琮」ではないかとする（西藏の古碉も「琮倉」とよばれる）。碉楼が最も密集するギャロン区は、元来ボン教の盛んな地域で、金川事変後、チベット仏教ゲルク派への改宗が強要されたものの人々のボン教への信仰は現在も篤い。ボン教には卵生説話が多出し、ボン教寺院や民家の経堂には大鵬鳥の絵や彫刻があり、ギャロンの土司はみな祖先の卵生説話を伝える。さらにナシ族トンパ教の経典や送魂図にもこの大鳥が描かれ、蔵彝走廊の爾蘇チベット族の送魂図には碉楼が描かれていることから広範囲の伝搬を指摘する。以上により碉楼はチベット仏教伝来以前の青藏高原の原始宗教であるボン教と密接に関係し、ボン教の大鳥を象徴するものではないかと推測する。ボン教について筆者は門外漢であるが、本章の内容は碉楼の神性を主張した第5章に続くもので、大きな構想をもつ説得力のあるものと思える。

第7章は、考古学上の資料から、石碉の分布が石棺葬の分布と極めてよく対応していること、共通の石崇拜や石積建築の技術の存在が推測されることを指摘する。石棺葬は、青藏高原地区に分布する考古墓葬遺跡の一種で、石板あるいは石を積み上げた墓室をもつ。新石器時代晩期から前漢末年まで行われ、後漢以降急速に消失した。1938年馮漢驥が岷江流域の羅卜寨で発見して以来、蔵彝走廊地区の岷江、大渡河、鮮水河等の河流台地で大量に発掘されている。特に、丹巴中路郷では石棺葬に加えて新石器時代の石積家屋跡も発見され、石碉と石棺葬に繋がる石積技術が注目されて

いる。碉楼に内包された歴史的文化的意味を探るうえで、より多くの考古学上の発見が期待される。

以上、5章から7章までを紹介したが、続く12章までの分析部分は、青蔵高原碉楼研究において今後とりあげられるべきテーマを系統的、学際的視点から選択して編集されたものと思われる。歴史学、考古学、宗教学、建築学、文化遺産の保護等の視点から総括的に論じられており、全体像をとらえる上で大変参考になる。しかし文化人類学的視点からのフィールドワークとその分析はほとんどみられない。例えばギャロン・チベット族という一つの集団にも地域性があり、それぞれ異なる背景がある。一つの民俗事象には、まずそれが行われている地域環境のなかでの意味が他の事象との関連から分析されなくてはならない。2015年8月、筆者は丹巴県と馬爾康県でギャロン・チベット族調査を行ったが、各村での碉楼に関する伝承や意識はかなり異なっていた。碉楼の神性についてもそれに関わる慣習が強く伝えられている地域もあれば、それを気にしない地域もあった。文化人類学的フィールドワークも急務であることを痛感した。また青蔵高原の碉楼群は、確かにかつての軍事上の防御性という機能は失っているが、現在の急速な観光開発においては決して過去の歴史的遺産ではなく、重要な観光資源として再生産されている。本書に補充すべき点がありとすれば、青蔵高原の碉楼を現在に生きる文化遺産として扱う視点、家碉を中心とした村落での聞き取り調査の徹底ではないかと思われる。

謝辞 本稿の一部は愛知大学研究助成 (C-174) 「中国式災害復興モデル」実施後のチャン族と羌文化」(2012年度・2013年度)の成果である。

主な参考文献

- 袁曉文等 (2003) 「蔵族伝統建築在現代社会中的變遷—丹巴県中路蔵族聚落環境調査」『西南民族大学学報』(人文社会科学版) 2003年第11期5~9
- 王正宇 (2012) 「蔵彝走廊西端的碉房及其空間意義—以金沙江三岩峡谷為例」『中華文化論壇』2012年第5期83~89
- 季富政 (2000) 『中国羌族建築』西南交通大学出版社
- 季富政 (2008) 「岷江上游的文明記憶—羌族碉楼与村寨」『中国文化遺産』2008

年第4期18

- 耿静(2014)『汶川羅卜寨田野調查報告』民族出版社
- 雀丹(1995)『嘉絨藏族史志』民族出版社
- 周思宇等(2013)「梭坡嘉絨藏族成年礼中的社会化」『考試』2013年第17期156
- 徐学書(2004)「川西北的石碉文化」『中華文化論壇』2004年第1期31~36
- 徐友輝等(2012)「試論嘉絨藏区的石砌建築特色」『四川職業技術學院』第22卷第4期143~146
- 庄学本(1939)「西康丹巴調查」『西南边疆』1939年第6期
- 庄春輝(2004)「川西高原的藏羌古碉群」『中国西藏』2004年第5期
- 秦和平(2013)「丹巴百年來政治、經濟及習俗演變—章谷屯的設立与發展為例」『民族學刊』總15 61~67
- 西南民族大学西南民族研究所(2007)『川西北藏族羌族社会調查』民族出版社
- 石碩(2001)『藏族族源与藏東古文明』四川民俗出版社
- 石碩(2008)「隱藏的神性：藏彝走廊中的碉楼—從民族志材料看碉楼起源的原初意義与效能」『民族研究』2008年第1期56~65
- 石碩(2008)「從新石器時代文化看黄河上游地区人群向藏彝走廊的遷徙」『西南民族大学學報』(人文社会科学學報)2008年第10期1~7
- 石碩(2010)「“邛籠”解讀」『民俗研究』2010年第6期92~100
- 石碩(2011)「青藏高原“碉房”积義—史籍記載中的“碉房”及与“碉”的区分」『思想戰線』2011年第3期第37卷110~115
- 石碩(2012)『青藏高原碉楼研究』中国社会出版社
- 石碩(2012)「青藏高原碉楼的起源与苯教文化」『民俗研究』2012年第5期
- 石碩主編(2005)『藏彝走廊：歷史与文化』四川人民出版社
- 石碩・劉俊波(2007)「青藏高原碉楼研究的回顧与展望」『四川大学學報』2007年第5期74~80
- 石碩・陳東(2011)「有關青藏高原碉楼的伝説与民俗事象」『西北民族大学學報』(哲学社会科学版)2011年第4期85~91
- 石碩・楊嘉銘・鄒立波(2012)『青藏高原碉楼研究』中国社会科学出版社
- 関雪峰(2006)「淺談嘉絨藏族古碉建築—丹巴县中路、梭坡碉楼民居」『住区研究』136~139
- 宋興富等(2006)「丹巴古碉群現狀及價值」『康定民族師範高等專科科学學報』第15卷第4期1~5
- 孫宏開(1981)「“邛籠”考」『民族研究』1981年第1期

- 孫宏開 (1986) 「試論“叩籠”文化与羌語支語言」『民族研究』1986年第2期
- 多爾吉 (1996) 「嘉絨藏区碉房建築及文化探微」『中国藏学』1996年第4期
- 張曦・黃成龍主編 (2015) 『地域棱鏡—藏彝走廊研究新視角』学苑出版社
- 張昌富 (1996) 「嘉絨藏族的石碉研究」『西藏研究』1996年第4期
- 陳学義・陳卓玲 (2014) 「丹巴古碉相關問題探究」『四川民俗学院学报』第23卷第2期17~25
- 陳丁漫 (2015) 「四川茂縣鷹嘴河村民的碉楼本土認知調查研究」『景德鎮学院学报』第30卷第2期75~78
- 任乃強 (2000) 『西康図経』 西藏古籍出版社
- 馬長寿 (2003) 『馬長寿民族学論集』 人民出版社
- 馬長寿主編・李紹明整理 (2007) 『涼山美姑九口郷社会歴史調査』(藏彝走廊研究叢書) 民族出版社
- 馮敏 (2010) 『扎巴藏族：21世紀人類学母系制社会田野調査』(藏彝走廊研究叢書) 民族出版社
- 彭代明 (2009) 「夯成千古奇碉 写就万年絶史—布瓦山黄土巨碉邛籠审美探索」『学術教育』2009年第6期140~141
- 彭陟焱 (2010) 「論大小金川戦争中碉楼的作用」『西藏民族学院学报』(哲学社会科学版) 2010年第3期19~22
- 松岡正子 (2000) 『中国青藏高原東部の少数民族 チャン族と四川チベット族』ゆまに書房
- 牟子 (2002) 「丹巴高碉文化」『康定民族師範高等専科学学校学报』2002年第3期
- 楊永紅 (2009) 「西藏和藏彝走廊地区的碉楼建築」『康定民族師範高等専科学学校学报』2009年第8期1~3
- 楊嘉銘 (1988) 「四川甘孜阿壩地区的“高碉”文化」『西南民族学院学报』(哲学社会科学版) 1988年第3期25~31
- 楊嘉銘 (2005) 「解説“嘉絨”」『康定民族師範高等専科学学校学报』第14卷第3期1~5
- 楊嘉銘等 (2004) 『千碉之国—丹巴』 巴蜀書社
- 楊嘉銘等 (2007) 『四川藏区建築文化』 四川民族出版社
- 於春 (2008) 「堅固の理由—理県桃坪郷碉楼和碉房調査」『中国文化遺産』2008年第4期23~31
- 姚軍 (2008) 「丹巴薩拉卡經堂碉楼建築群 碉楼維修的一次探索」『中華文化遺産』

- 2008年第4期40~45
- 喇明英(2009)「羌族村寨重建模式和建築類型对羌族文化重構的影響分析」『中華文化論壇』2009年第3期111~114
- 蔡家麒(2008)『藏彝走廊中的獨竜族社会歷史考察』(藏彝走廊研究叢書)民族出版社
- 李錦(2008)『民族文化生態与經濟協調發展—对瀘沽湖周边及香格拉的研究』民族出版社
- 李錦(2012)「人神分界和僧俗分類：家屋空間的上下秩序—对雅安市宝興県磧磧藏族鄉的田野調查」『西南民族大学學報』(人文社会科学版)2012年第8期11~16
- 李光明等(2004)『川西民俗調查記錄1929』台北中研院歷史語言研究所
- 李紹明(2008)『藏彝走廊民族歷史文化』(藏彝走廊研究叢書)民族出版社
- 李紹明等(1985)『羌族史』四川民族出版社
- 李紹明等(2004)『葛維漢民族考古學論集』巴蜀書社
- 李紹明・童恩正主編(2008)『雅砻江流域民族考察報告』(藏彝走廊研究叢書)民族出版社
- 李紹明・劉俊波編(2008)『爾蘇藏族研究』(藏彝走廊研究叢書)民族出版社
- 李星星(2007)『蟹螺藏族：民族學田野調查及研究』(藏彝走廊研究叢書)民族出版社
- 李星星(2008)『李星星論藏彝走廊』(藏彝走廊研究叢書)民族出版社
- 李星星・馮敏・李錦ら(2007)『長江上遊四川横断山区生態移民研究』民族出版社
- 李涛(1993)「試析大小金川之役及其对嘉絨地区的影響」『中国藏學』1993年第1期
- 李明・袁妹麗(2004)「淺論丹巴甲居嘉絨藏寨民居」『宜賓學院學報』2004年第4期86~88
- 劉搵(2014)「旅遊背景下少数民族村落的傳統民居保護研究——以嘉絨藏族民居為例」『西南民族大学學報』(人文社会科学學報)2014年第2期155~158
- 劉波(2007)「試論藏羌古碉的類別及其文化價值」『貴州民族研究』2007年第6期173~182
- 劉勇・馮敏(2005)『鮮水河畔道孚藏族多元文化』四川民族出版社
- 林俊華(2013)「嘉絨的文化符号」『四川民族學院學報』第22卷第1期1~7